

ドイツ本土心臓部への攻略からチェコ、オーストリア国境へ



連合軍

1944年末から45年初頭にかけて、ドイツ軍のアルデンヌ攻勢を撃退した連合軍は、敗走する同軍を追って進撃、占領下にあったオランダ、ベルギー、フランスの町や村を次々と解放していった。そして3月には随所でライン川を渡り、遂にナチの牙城、第3帝国本土へとその歩を進めたのである。

そして今回は、ライン渡河以降の連合軍の動きを追ってみたい。ただし、ドイツ本土防衛の最後の頼みの綱、ラインを渡るという戦史上の大きなエポックの後だけに、どの戦区でも特筆に値する大戦闘はほとんど起きておらず、「VEデイを抑えるための大掃除」といった感が強い。その代わりに、意味のない遅滞戦を死にもの狂いで戦うドイツ兵の小集団を排除するという、連合軍にとっては、もっとやっかいで血生臭く、しかも損害の多い小戦闘が各地で戦われた。

ナチ根絶のためには、連合軍は最後まで「血」で代償を支払わなければならなかったのである。

☆イギリス連邦軍の進撃

西ヨーロッパ低地諸国沿いに進撃してきたモントゴメリー元帥率いる第21軍集団は、1945年3月23日、デンプシー中將のイギリス第2軍とクレラー中將のカナダ第1

軍をもって“ブランダー”作戦を実施、ライン川渡河に成功した。翌24日には、同作戦に附属して計画された空挺作戦“パーシティ”が実施され、ノルマンディー以来歴戦のイギリス第6空挺師団と、初陣のアメリカ第17空挺師団“サンダー・フロム・ヘブン”がウェーゼル近郊に降下した。

渡河作戦では、やはりノルマンディー以来の“ホボーズ・ファニーズ”こと第79機甲師団の特殊車輛、とくに第33機甲旅団をはじめとするLVT“バッファロー”装備部隊と、スタッフォードシャー・ヨーマンリー連隊や第44王立戦車連隊などのDD戦車装備部隊が、またしても大活躍した。また、ここでとくに着目したいのは空挺部隊の装備についてだろう。

イギリス第6空挺師団は、すでにノルマンディー戦において、麾下の空挺偵察連隊に所属する“テトラーク”軽戦車をハミルカー重空挺グライダーで空輸、実戦使用した経験を持つが、今回の作戦では、アメリカ製のM22空挺戦車“ロウカスト”を投入した。生産国のアメリカでは空輸手段が確保できず、とうとう最後まで実戦に使用されなかったため、これがM22空挺戦車唯一の実戦参加記録ということになる。

一方、アメリカ第17空挺師団は57mm無反動砲M18と75



最後の進撃

白石 光

mm無反動砲M20を新しく装備しており、ノルマンディー戦時や“マーケット・ガーデン”作戦時のアメリカ軍空挺師団に比べ、その対戦車火力に飛躍的な向上が見られた。

こうして、“ブランダー”作戦はわずか3日で幅50kmもの橋頭堡を確保、大成功を収めたわけだが、その動員兵力、事前準備の規模の大きさを考えると、この作戦もまた、よくも悪くもいかにもモンティ的な「大作戦」であったと評することができよう。

北アフリカでの大したことのない戦績に加えて、“マーケット・ガーデン”作戦の決定的失敗により、本来なら罷免されておかしくないはずの愚将がここまで生き延びてきたのは、ひとえに彼の出身に起因するイギリス政界と軍上層部へのコネの力と、時のアメリカのスーパーヒーロー・バットンに対するイギリスの対抗馬としての存在、これだけが、彼をこの地位に留まらせ続けたのだといえは言い過ぎであろうか。

しかし少なくとも、モントゴメリーをロンメルのリバルと表現してしまうのは、ロンメルに対して申し訳ない。

ところで、第21軍集団に配属されたアメリカ軍、シンブソン中将率いる第9軍もまた、1945年3月24日にライ

ン川を渡河していた。その後、第21軍集団の最右翼に位置する同軍は、橋頭堡からリップ川沿いに進撃を続けるイギリス第2軍の右側面を守りつつさらに右へと展開、ドイツ工業の心臓部であるルール地方の左側面の包囲陣を形成しながら、4月1日、ルールの右側面を包囲しながら、第21軍集団の右翼を進撃してきたアメリカ第12軍集団麾下のホッジス中将率いる第1軍と、リップシュタットで連携した。

この結果、左側面をアメリカ第9軍に、右側面を同第1軍に包囲されたルールは完全に孤立し、以後、“ルール・ポケット”と呼ばれることになった。

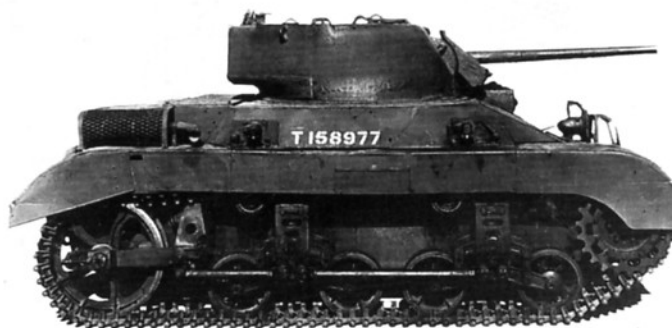
その頃、イギリス第2軍とカナダ第1軍は橋頭堡からショットガンの弾丸のように扇状に展開、沿岸部を掃討しながら前進していた。進路上にはムンスター、オスナブリュックといったドイツの著名な都市も多く、それらは一応の抵抗を示したが、いずれも2〜3日で陥落するのが普通だった。とはいえ、個々の小戦闘に目を向けてみれば、そこには少なからぬ損害が彼我共に生じていた。この地方に多いレンガ作りの建物は、いずれもドイツ人の几帳面さで頑丈に建てられていたが、これらは守る側にとっては格好の防衛陣地となったのである。

しかもドイツ軍側は、少ないながらも手持ちの対戦車兵器のすべてを動員して、イギリス連邦軍の機甲部隊を相手に遅滞戦闘を挑んできた。

その主役は、旧式な対戦車砲に短射程の外装式成形炸薬弾を装填して一発勝負に賭ける初老の戦車猟兵の分隊、パンツァーファウストを抱え、街の十字路に面した建物の2階に潜んで戦車を狙撃しようと試みるヒトラーユーゲントの少年たち、本来は街の防空のため射界の開けた高台に据えられていた8.8 cm両用砲を郊外の小さな森の中に隠し、雑多な旧式兵器を持ったフォルクス・シュトゥルムの一群を掩護部隊として連合軍縦隊を待ち受ける孤立した空軍高射砲小隊などであった。

いずれも大した戦力ではないが、ほとんど組織的な抵抗線を構築するでもなく、無秩序に散在するこれらの阻

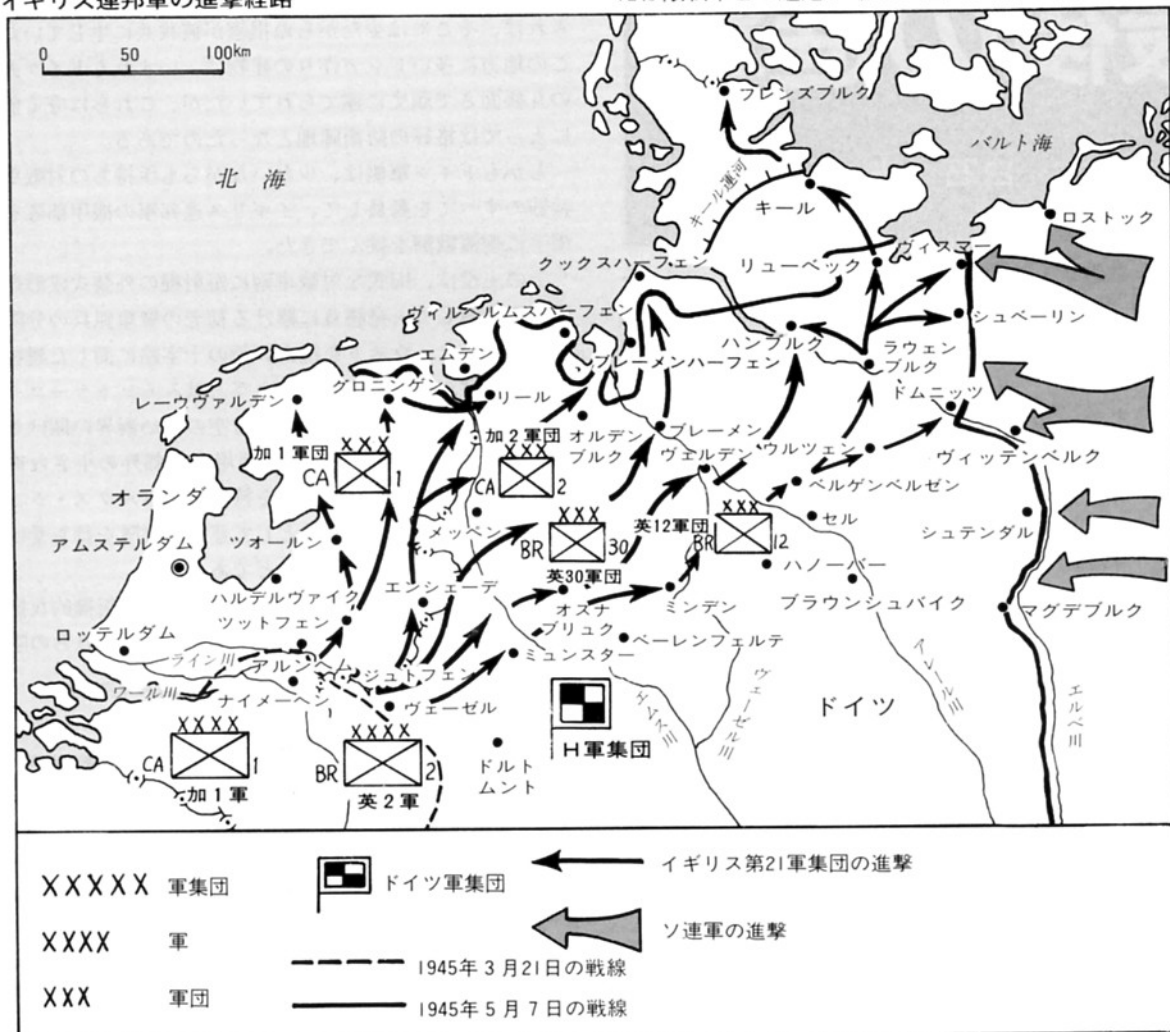
イギリス第6空挺師団が使用したM22ロウカスト空挺戦車





ライン川を渡河せんとするイギリス軍部隊

イギリス連邦軍の進撃経路



止部隊と遭遇する度に、イギリス連邦軍は数輦の戦車と数名から十数名の将兵の命に加えて、時間をも失い続けなければならなかった。

☆大戦末期の歩戦共同作戦

この頃のイギリス連邦軍の典型的な歩戦連合部隊の前進隊型は、だいたい以下のようなスタイルだった。まず、17ポンド砲装備戦車の1コ小隊が先兵グループを形成、後にはユニバーサル・キャリアーかハーフトラックに乗った装甲歩兵1〜2コ小隊が続く。その背後には戦車中隊本部と装甲歩兵中隊本部に加えて、戦車中隊直属の架橋戦車を伴う工兵小隊、砲兵前進観測車や空軍地上班の通信車という順序になる。

さらに、もし配属されていれば地雷除去戦車小隊などで形成された本部グループが続き、後には戦車中隊の残余と装甲歩兵中隊の残余が、予想される戦闘の様相（例えば敵戦車との遭遇が考えられれば戦車が前、市街戦が

ライン川を渡河してドイツ本土に入ったイギリス陸軍第6近衛装甲師団のチャーチル戦車部隊。各戦車の車体後部には、半コ分隊相当の歩兵が跨乗している



生じそうなら装甲歩兵が前)に応じた序列で従う。

ところが、この序列を巡ってちょっとしたいざこざが生じることもあった。それは戦車部隊の連中から出た不満である。「もうジェリーどもの戦車と正面からはち合わせなんてことは起きそうもないぜ。それより、ドイツの子供や老人の乞食兵隊を瓦礫の山からはじくり出すことが中心なんだから、小回りのきく歩兵が前を進めばいいじゃないか」というものだった。

確かに、この話には一理あるようにも思える。だが本音は、市街地の狭い路地や十字路でパンツァーファウストなどによる伏撃を受けても、ただでさえ視界が悪い戦車からでは、誰かがやられてからでなければ発見できないことが多く、終戦を目前にして続出する細かい損害に戦車部隊員たちが及び腰になっていたのである。

これに対する歩兵側の意見は、もちろん「こちとら、鉄火場では丸裸も同然の生身なんだぜ。おたくらは分厚い装甲に守られて、ついでにでっかい大砲も付いているんだから、まずジェリーの抵抗拠点をふっ飛ばしてくれよ。そうしたら俺らが突入するから」というものであった。

歩戦協同行動で常に戦われたこの議論の決着は、何のことはない、ソ連軍の戦車搭乗歩兵と同様のスタイルを導入することで決着がついた。つまり、戦闘グループのシャーマンやチャーチル1輦につき、歩兵半コ分隊が搭

乗して、全周警戒をしながら前進するという戦術である。

ただし、ソ連軍と決定的に異なっていたのは、そろそろという状況になるまで歩兵たちはユニバーサル・キャリアーやハーフトラックで楽々と移動していたという点と、ドイツ軍側の前進阻止砲撃がほとんどなかったので、戦車上で「丸裸」の状態の歩兵たちも、「活躍の場」に着くまでさほど危険ではなかったという点だろう。逆にいえば、もしソ連軍での戦車搭乗歩兵の損害の実情を知っていたら、連合軍では絶対にこのような戦術はとられなかったはずだ。

要するに「地獄の東部戦線」では苛酷な損害を覚悟しなければならない戦術でも、防衛側の力が弱かったおかげで、西方戦線では何の問題もなく運用できたのである。

とはいえ、連合軍側戦車部隊もパンツァーファウストやパンツァーシュレккеにはほとんど手を焼いたようで、従来からの予備履帯やサンドバッグによる防護力強化に加えて、ついにドイツ戦車のようなサイドスカートまで装備するに至った。これは、装甲師団や装甲旅団のワークショップが四分の一インチ鋼板を現地で加工した即製品で、やはり即製の懸吊ラックを砲塔や車体周辺に溶接し、そこにぶら下げるような形で、サイドスカートを装備するというものである。

しかし、このサイドスカートはいかんせんハンドメイドだったため、とても全軍の戦車に装備するというわけ



にはいかなかった。そこで、戦闘グループ用の戦車にそれらを重点的に装備し、不公平がないよう、乗員のみをローテーションで入れ替えるという方法を講じた部隊もあった。

ちなみに、このサイドスカートはよほど好評だったとみて、シャーマンの場合は、アメリカから到着した貸与車輛をイギリス本土で連邦軍向けに改装を施す際、標準装備として懸吊ラックが溶接されることになり、チャーチルの場合は、新造車体に対する追加装備として、生産

ドイツ北部を東進するイギリス連邦軍



ライン上でボルトオン式の懸吊ラックとサイドスカートが装着された。だがそれらのほとんどは、残念なことに終戦間近まで前線部隊には届かなかった。

他の特筆すべき点は、ドイツ本土に入ってから特殊宣撫工作隊から派遣された宣撫工作車が、必ずといってよいほど戦闘グループと共に行動したことだろう。というのも、それまでの進撃時のようにドイツ占領下の街や村を「解放」するのではなく、ドイツ本土に入からは「占領」することになったからだ。

この特殊宣撫工作隊は、防衛兵力が存在しないことが明らかな町や村への進出時に、連合軍が今から入城する旨をスピーカーで事前に放送したり、入城後には市民活動を統制するための情報などを伝達する他、わずかな抵抗に出会った際には、特殊宣撫隊員が流暢なドイツ語で、まだ戦うことの無意味さを問うて降伏を促すなど、知られざる大活躍をしている。

この特殊宣撫工作は、イギリス連邦よりもアメリカの方が力を注いでいた。さすがに移民のお国柄らしく、ドイツ言語系住民の宣撫隊員を集めやすかったこともその要因であろう。彼ら宣撫隊員たちは、M5軽戦車の砲塔を外して大型スピーカーを取り付けた宣撫工作車や、今のものに比べてやたらに大きなハンドスピーカーを背に、戦線各地で活発な活動を繰り広げていた。しかも、彼らの行動は終戦を迎えてからも止まることはなかったのである。その多くは戦闘部隊から軍政部隊へと転属のうえ、占領軍行政の重要な一翼を狙ったからだ。

さて、前進するイギリス連邦軍は、4月2日にムンスターを、また、4月4日にはオスナブリュックを占領

◀連合軍の特殊宣傳
工作隊が使用した、
M5軽戦車改造の宣
傳工作車

▶守勢に立たされた
ドイツ軍は、次々と
各地のポケットに追
い込まれていった
▼リュベック市内
に入城したイギリス
軍



した。一方、最沿岸部を進むカナダ第2軍は、4月10日のイーゼル川渡河の後にオランダ領内を北海方面に向けて進撃、ブルーメントリットのドイツ第25軍を沿岸部へと圧迫すると同時に、ブラスコヴィッツのH軍集団そのものをオランダに封じ込めるような機動を行っていた。

そしてこの頃になると、前衛を行く部隊はドイツ軍との戦闘ではなく、捕虜の後送と占領地住民の統制に加えて、潜伏、逃走を企てるナチ党員や親衛隊員の狩り出しが主任務となっていた。そのため、本来なら戦地では序列のかなり後方に位置するはずの憲兵隊や衛生隊が、前衛戦闘グループの直後に、連隊や旅団の単位で後続するという新たな光景が見られるようになった。

以降、イギリス連邦軍の前進速度にはさらに弾みがかかり、4月13日にはベルゼン収容所が解放され、全世界に対して、ナチの恐るべき巨大犯罪の全貌が明らかにされた。その後、4月26日にはブレーメンが陥落、さらにリュベックとハンブルグに向けての大進撃が続く。こうして5月3日、遂にハンブルグが占領され、イギリス連邦軍のドイツ本土攻略は事実上終了したのである。

☆ジョン・ブルの怒り

話は遡って3月中旬のこと、アイゼンハワー将軍からスターリンに宛てた1通の通信が発信された。この通信は、連合軍の部隊配置と今後の進撃計画などの詳細を伝

えたものだった。つまり、主攻軸をエルフルトとライプツィヒに向け、助攻軸をニュルンベルク、レーゲンスブルク、リンツへ向けるという内容である。

これを知ったイギリス側は非常に怒り、強い抗議をワシントンに寄せた。イギリスはかねてより、直接ベルリンを目指す進撃計画を支持していたからである。しかしアメリカは、当時ドイツが構築中といわれていた、アルプス要塞（国家要塞）の脅威の排除を前提とした進撃計画に固執した。というのも、ヨーロッパ派遣軍総司令官アイゼンハワーからアメリカ陸軍参謀総長マーシャルへと繋がる軍部のラインでは、政治的観点よりも軍事的観点での判断が優先したからだ。

しかも悪いことに、本来ならこのような軍部の判断に対して政治的要素を加味し、適切な最終決定を下すべき存在である肝心の大統領・ルーズベルトが病に冒されて衰弱していた。結果、その決定はマーシャルと統合参謀本部に委ねられたわけだが、それが先の通信文に記された内容だったのである。

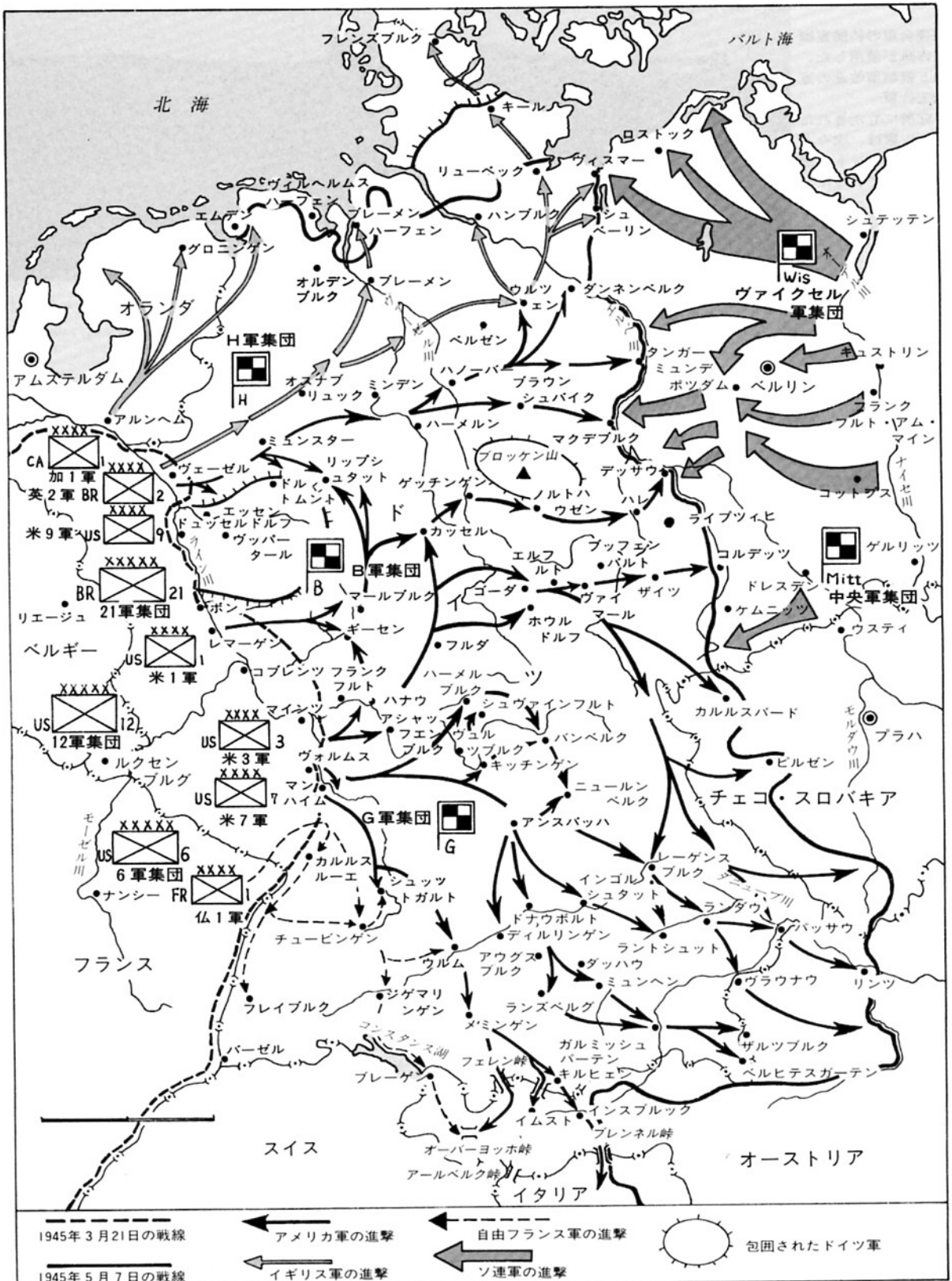
このような決定が後世にどういった影響を及ぼしたかは、終戦後間もなく始まった東西冷戦をみるまでもなく明らかである。もし連合軍が直接ベルリンを占領していたら、戦後のヨーロッパで西側連合諸国は、より強力な立場をとり得たであろうことは想像に難くない。チャーチルとイギリス政界人々は、そんな未来を予見したからこそ猛烈な抗議を行なったのだった。

というわけで、やはり戦争とは政治的理由から戦うべきものであって、軍事的理由はあくまで二義的なものにしかすぎないという見本のような出来事が、この事件だったといえよう。

☆アメリカ軍の進撃

一方、西ヨーロッパ中央部を突き進むアメリカ軍主体の第12軍集団と、その右翼に隣接する第6軍集団もまた、随所でライン川を渡河してドイツ本土へと侵入していた。中でも特に有名なのは、ミリキン少将率いる第3軍団麾下の第9装甲師団“ファントム”によって1945年3月7

アメリカ軍の進撃経路





▲瓦礫と化したカッセル市内を征くアメリカ軍部隊

◀軍事的理由で連合軍の進撃路からベルリンを外したアイゼンハワー元帥

日に戦われた、レマーゲンのルーデンドルフ鉄橋奪取にまつわる戦闘だろう。この戦いでは、M26“パーシング”重戦車（戦後、中戦車に等級変更）が戦車部隊の先鋒となり、その90mm砲と重装甲の威力をフルに発揮した。

また3月22日には、エディ少将率いる第12軍団麾下の第5歩兵師団“レッド・ダイヤモンド”が、ろくな準備もしないままニーアシュタイン近隣でライン川を渡河してしまった。この第12軍団はかの“パットン軍”こと第3軍に所属していたが、翌23日のイギリス連邦軍のライン川渡河作戦“プランダー”発動を直前に控えて、パットンは、見事モンティの鼻をあかすのに成功したのである。

この例を見るまでもなく、戦術的な閃きと果敢な攻撃精神に関しては、モントゴメリーよりパットンの方が何枚も上手であった。ただパットンは、その独特のアクの強さが災いして、連合軍内部での政治力の面で、モンティ

に劣っていたのである。また、彼のアクの強さは同じ軍内部にも、少なからぬ敵を作る結果を招いていた。この時期、パットンはあからさまにソ連に対する嫌悪を示していたが、これもまた、その戦績にもかかわらず終戦と共に、パットンがババリアの軍管区司令官という閑職に左遷される原因となった。

しかし、軍人はあくまで政治家ではなく、戦いに勝つことだけがその使命と考えるなら、パットンこそ、アメリカが輩出した最高の“戦術級指揮官”ということができるかもしれない。だが現実には、星が3つ以上（中將以上）の将官ともなれば、それなりの政治的駆け引きに対する才能も要求されるわけで、この点、モントゴメリーに比べてパットンのそれはかなり劣っていた。やはり、「天は二物」を与えなかったのであろう。

それでもひとつだけいえるのは、統率のスタイルと指揮のセンスはやや異なるものの、パットンこそ、ロンメ



強力な90mm砲と重装甲を備えたアメリカ陸軍のM26パーシング重戦車。残念ながら本車の投入には遅きに失した感があった



アメリカ第3軍司令官パットン将軍（左）とイギリス第21軍集団司令官モントゴメリー元帥（右）

ルと比肩し得る連合国側唯一の将軍ではなかったかということである。そんな意味からも、パットンは「戦争が起こるまでちゃんと油を差して倉庫に保管しておく」タイプの軍人だったといえよう。

ところで、装備の面からこの時期のアメリカ軍を見ると、とくに装甲兵力においては、ノルマンディー戦時に比べて格段に優秀なものが配備されつつあった。

例えば、3インチ砲搭載のM10駆逐戦車（イギリス軍の名称は“ウルバリン”）は、90mm砲搭載のM36“ジャクソン”駆逐戦車と、76mm砲搭載のM18“ヘルキャット”高速軽駆逐戦車に次々と取って代わられており、M4“シャーマン”中戦車も、75mm砲搭載型の装備比率がどんどん減少し、装甲を強化した76mm砲搭載型と105mm榴弾砲搭載型が主流を占めるようになっていた。

軽戦車では、非力なM3、M5“スチュアート”が軽量75mm砲搭載のM24“チャーフィー”に徐々に交代しつつあり、強力な90mm砲と重装甲を誇るM26“パーシング”重戦車も、その実戦配備が開始されていた。

“アニマル・シリーズ”をはじめ、優秀なドイツ製戦車群との戦闘を意識して開発されたこれら新型車輛だったが、いずれもその登場は、やや遅きに失した感があった。というのは、この時期ともなると対戦車戦闘はほとんど起こらず、戦いの多くが連合軍戦車対ドイツ軍歩兵の様相を呈していたからである。

しかし、どの車種もその性能に見合った運用上の柔軟性を示し、運用者側のニーズによく応えていた。M36やM18は主砲の低伸弾道性を活かして、町や村に突入する歩兵部隊の背後から、直接照準による狙撃的な拠点潰しの砲撃任務によく使われ、M24は機械的信頼性の高さと走行性のよさが買われて、コンボイ・エスコートにも使われた。

このように、ますます充実しつつあった連合軍戦闘車輛に対抗するドイツ軍戦車がほとんどいなかったことは、単純に技術的興味の側面から見れば、やや残念なことだっ

たといえよう。もっとも、当の戦車兵たちにしてみれば、強力な敵と遭遇しないで済んだことは大いに幸運だったのだろうが。

3月25日になると、今度は第8軍団がボッパルト近隣でライン川を渡河した。この軍団も第3軍の所属であった。第8軍団といえば、アルデンス攻勢でドイツ軍の猛攻の矢面に立たされた軍団だが、ライン川渡河により、ようやくその仇を討つことができた格好となった。もっとも、軍団に所属する師団の多くは、アルデンス攻勢時とは入れ替わっていた。

翌26日、連合軍戦線の右翼を形成する第6軍集団麾下のパッチ中将率いる第7軍がウォルムスとマンハイムの

1945年3月下旬以降の連合軍の編成

第21軍集団

（バーナード・モントゴメリー元帥）

カナダ第1軍

（ヘンリー・クレアラー中将）

カナダ第1軍団 カナダ第2軍団 イギリス第1軍団

イギリス第2軍

（マイルズ・デンプシー中将）

イギリス第8軍団 イギリス第12軍団 イギリス第30軍団

アメリカ第9軍

（ウィリアム・シンブソン中将）

アメリカ第13軍団 アメリカ第16軍団 アメリカ第19軍団

※カナダ、オランダ、ベルギー、ポーランド軍を含めたイギリス連邦軍主体。右翼に隣接するアメリカ第12軍集団との調整上の便宜をはかるため、軍集団の右翼掩護部隊としてアメリカ第9軍が一時的に配属されたりもした。戦線左翼、北海沿岸沿いに低地諸国を進撃。

※各軍団は戦況の推移に応じて何度か所属の変更があった。

第12軍集団

（オマー・ブラッドレー大将）

アメリカ第1軍

（コートニー・ホッジス中将）

アメリカ第3軍団 アメリカ第5軍団 アメリカ第7軍団

アメリカ第3軍

（ジョージ・パットン中将）

アメリカ第8軍団 アメリカ第12軍団 アメリカ第20軍団

第6軍集団

（ジェイコブズ・ディバース大将）

アメリカ第7軍

（アレクサンダー・パッチ中将）

アメリカ第6軍団 アメリカ第15軍団 アメリカ第21軍団

フランス第1軍

（ドゥ・ラトル・カシニ中将）

フランス第1軍団 フランス第2軍団

※各軍団は戦況の推移に応じて何度か所属の変更があった。

間でライン川を渡河している頃、その左翼の第3軍戦区では、ひとつの事件が起きていた。事件の張本人は、もちろんパットンである。

彼は、麾下の第12軍団に所属する第4装甲師団“ブレイク・スルー”のホッジ少将に、ハンメルブルクにあるドイツ軍の第13B捕虜収容所に対する救出作戦を実施するため、機動部隊を派遣することを命じた。

こうして救出部隊は出発し、何とか収容所まで辿り着いたものの、帰路にドイツ軍の包囲攻撃を受けて降伏に追い込まれてしまった。いくらドイツ軍がボロ負けしているとはいえ、敵陣後方約100kmに位置する捕虜収容所を解放してトンボ帰りしようなどという作戦には、所詮無理があったのである。では、なぜパットンはこのような作戦を敢えて推進したのであろうか？

それを問い正すきっかけとなったのは、作戦失敗後の記者会見の席での、ある記者の発言だった。彼は、1943年にチュニジアで捕虜になったパットンの娘婿、ジョン・

ウォーターズ中佐がこの収容所にいたのは、単なる偶然ではないのではないかという疑問を投げかけたのだ。この質問に対してパットンは、「そんなことは知らなかった。この作戦はあくまで陽動作戦の一部である」ととぼけ、とりあえず事件そのものを、その段階ではうやむやにしたかに見えた。

事実、かのジョン・トーランドがその著書『最後の100日』の中で改めて触れるまで、この事件は戦史の裏の知られざる出来事のひとつだった。だが軍内部では広く知れ渡っており、それが戦後、パットンを閑職へと追いやるいくつかの要因のひとつになったのだった。

☆エルベ川、チェコへの進撃

一方、そんなことには関係なく、戦況は着々と進捗していた。戦線中央部ではホッジ中將麾下の第1軍に所属する第3軍団がマルブルクを占領、続いてエーデル川を渡河した。そして、その右翼の第3軍はゴータとカッ

ライン川以東の作戦に参加した連合軍師団

イギリス連邦軍

第7装甲師団 “デザート・ラッツ”

第11装甲師団

第79装甲師団 “ファニーズ”

近衛装甲師団

カナダ第4装甲師団

カナダ第5装甲師団

第3歩兵師団

第5歩兵師団

第40歩兵師団

第43歩兵師団 “ウェイクシス”

第50歩兵師団 “ノーザンブリアン”

第51歩兵師団 “スコットランド・ハイランダーズ”

第52歩兵（山岳）師団 “ローランド”

第53歩兵師団 “ウェルシュ”

カナダ第1歩兵師団

カナダ第2歩兵師団

カナダ第3歩兵師団

ポーランド第1装甲師団

第1空挺師団

第6空挺師団

※他に軍集団、軍、軍団直轄の砲、装甲（戦車）、歩、工、衛生、化学、コマンド、軍政などの旅団、連隊多数。

アメリカ軍

第1装甲師団 “オールド・アイアン・サイズ”

第2装甲師団 “ヘル・オン・ホイールズ”

第3装甲師団 “スピアーヘッド”

第4装甲師団 “フォー・アーマード”

第5装甲師団 “ピクトリー”

第6装甲師団 “スーパー・シクセス”

第7装甲師団 “ラッキーセブンズ”

第8装甲師団 “サンダリングハード”

第9装甲師団 “サムタイム・コール・フアントム”

第10装甲師団 “タイガー”

第11装甲師団 “サンダーバード”

第12装甲師団 “ヘルキャット”

第13装甲師団 “ブラックキャット”

第14装甲師団 “リベリター”

第16装甲師団

第1歩兵師団 “ビッグ・レッド・ワン”

第2歩兵師団 “インディアンヘッド”

第3歩兵師団 “マルヌ師団”

第4歩兵師団 “アイヴィー”

第5歩兵師団 “レッド・ダイヤモンド”

第8歩兵師団 “バス・ファインダー” または “ゴールデン・アロー”

第9歩兵師団 “オールド・リライアブルズ”

第10歩兵（山岳）師団 “モンタニヤーズ”

第26歩兵師団 “ヤンキー”

第28歩兵師団 “キーストーン”

第29歩兵師団 “レッツ・ゴー” または “ブルー&グリーン”

第30歩兵師団 “オールド・ヒッコリー”

第34歩兵師団 “レッド・ブル”

第35歩兵師団 “サンタ・フェ”

第36歩兵師団 “テキサス師団”

第42歩兵師団 “レインボー”

第44歩兵師団

第45歩兵師団 “サンダーバード”

第63歩兵師団 “ブラッド&ファイア”

第65歩兵師団 “バトル・アックス”

第66歩兵師団 “ブラック・パンサー”

第69歩兵師団 “ファイティング69”

第70歩兵師団 “トレイル・ブレイザーズ”

第71歩兵師団 “レッド・サークル”

第75歩兵師団

第76歩兵師団 “リバティーベル” または “オン・アウ”

第78歩兵師団 “ライトニング”

第79歩兵師団 “クロス・オブ・ロレーヌ”

第80歩兵師団 “ブルーリッジ”

第83歩兵師団 “サンダーボルト”

第84歩兵師団 “レールス・ブリッター”

第85歩兵師団 “カスター”

第86歩兵師団 “ブラック・ホーク”

第87歩兵師団 “ゴールデン・エーコン”

第88歩兵師団 “ブルー・デビルズ”

第89歩兵師団 “ザ・ローリングW”

第90歩兵師団 “タフ・オンブレ”

第91歩兵師団 “ワイルド・ウエスト師団” または “パウダー・リヴァー”

第92歩兵師団 “バッファロー”

第94歩兵師団 “ニーフ・キャット”

第95歩兵師団 “アイアンメン・オブ・メッツ”

第99歩兵師団 “バトル・ベイズ”

第100歩兵師団 “センチュリー”

第102歩兵師団 “オザーク”

第103歩兵師団 “カクタス”

第104歩兵師団 “ティンバー・ウルフ”

第106歩兵師団 “ゴールデン・ライオンズ”

第13空挺師団

（ヨーロッパでは戦域唯一の実戦未経験師団）

第17空挺師団 “サンダー・フロム・ヘブン”

第82空挺師団 “オール・アメリカン”

第101空挺師団 “スクリーミング・イーグルス”

※他に軍集団、軍、軍団直轄の砲、装甲（戦車）、歩、工、化学、衛生、レンジャー、軍政、輜重などの連隊、大隊多数。

※在イタリア師団も含む

フランス第1軍

自由フランス第1装甲師団

自由フランス第2装甲師団

自由フランス第1リビア歩兵師団

自由フランス第2歩兵師団



セルを目指して進撃していた。4月に入ると、5日にベーゼル川の渡河が始まった。また、ルール・ポケットのドイツ軍を攻撃中の第1軍と第9軍のうち、第9軍がエッセンへの侵入を果たした。

第6軍集団ではその右翼側、つまり連合軍戦線の最右翼を受け持つドゥ・ラトゥル中将率いるフランス第1軍が、3月31日にシュパイヤー近隣でライン川を渡河した後、着実な進撃を続け、4月8日にはフォルツハイムを占領する。そしてイギリス連邦軍戦区でベルゼン収容所が解放された頃、アメリカ軍戦区でもブッヘンヴァルト収容所が解放された。また4月16日には、連続テレビ番

組でも有名になったコルディッツ特別捕虜収容所が解放された。

4月18日、ルール・ポケットのドイツ軍が全面降伏、B軍集団司令官モデル元帥は自決し、約32万5千名のドイツ軍将兵が連合軍の捕虜となった。同日、第9軍戦区ではマグデブルクが陥落、一方で、第3軍はチェコスロバキアとの国境を越えていた。

4月25日、この日は全連合国にとって記念すべき日となった。エルベ川河畔のトルガウで、第1軍が東から進撃してきたソ連軍と会合したのである。こうして遂に、東部戦線と西方戦線はひとつになったのである。翌26日



ニュールンベルク市内に突入したアメリカ第7軍第45師団のシャーマン戦車部隊

◀ドイツ本土南部を征くアメリカ第7軍の所属部隊

▶ライン川渡河後、ゲムンデンの市街地を掃討するアメリカ軍部隊



には、第3軍がレーゲンスブルクを占領しつつオーストリアとの国境を越えた。28日には第7軍がアウグスブルグを占領、第3軍によるダッハウ収容所の解放が29日と続く。

5月に入ると、3日の第7軍によるインスブルックの占領に続いて、第3軍麾下の第12軍団とジェロウ少将率いる第4軍団による、チェコスロバキアへの進撃が5日に開始された。血気にはやるパットンに対して、アイゼンハワーはブラッドレー経由でゴーサインを出したのである。

先鋒を努めるのは、第12軍団所属の第5歩兵師団と第90歩兵師団“タフ・オンブレ”で、それに第5軍団所属の第1歩兵師団“ビッグ・レッド・ワン”が後続した。進撃は順調に進み、その日の夕方には、第1歩兵師団がカルスバートに、第90歩兵師団はビルゼンへと向かっていた。

一方、チェコスロバキア国内では、レジスタンスの活動が頂点を迎えていた。奇しくも連合軍のチェコスロバキア進撃開始と同じ5日、プラハのレジスタンスもまた一斉蜂起しており、彼らはプラハ近郊にまで進出した第4機甲師団の偵察隊と接触、ソ連軍到着以前に首都の掃討を完了し、連合軍側に引き渡す用意があることを伝える。この情報は速やかにパットンへと報告されたが、パットンは大いに喜ぶと同時に、命令違反になりはせぬかとの心配も呼び起こすことになった。

というのは、チェコスロバキアへの進撃許可に際して、西進してくるソ連軍とはくれぐれも問題を起さぬよう、ブラッドレーに再三警告されていたからだった。ブラッドレーはまた、ビルゼンまで進出したら停止するようパットンに命じていたが、一方では、偵察任務であればプラハをも含む広範囲にわたっての行動も許可していた。

そこでパットンは、電話でブラッドレーに状況を報告すると共に、停止線に関する命令は絶対のものであるかどうか確認することにした。ブラッドレーはアイゼンハワーに確認をとったが、アイゼンハワーの方針は、どんな形にせよ連軍とのトラブルだけは避けようというもので、何としてもパットンを進めるわけにはいかなかった。これを聞いたパットンは猛烈に抗議したが聞き入れられず、結局、連合軍のチェコスロバキア進出は、ビルゼンまでで停止することになったのである。

なお、プラハのドイツ軍降伏は、停戦の発効日である5月8日のことであった。この日はまた、亡命していたノルウェー王室のオラフ皇太子とノルウェー、イギリス合同部隊がノルウェーに上陸した日でもあり、10日には、ノルウェーの対独協力者キンズリングとその支持者の一部がレジスタンスによって逮捕された。

☆おわりに

アメリカ第3軍によって解放されたドイツ領内のユダヤ人強制収容所





ドイツ南部からチェコスロバキアに向けて進撃を続けるアメリカ軍

こうして、ヨーロッパの長い戦いは終わった。1939年9月1日のドイツ軍のポーランド侵入以来、5年8カ月にも及ぶ長い戦争に、ついに終止符が打たれたのである。しかし、歴史とは皮肉なものだ。元はといえば、ドイツが第一次世界大戦に負けてナチが台頭し、その理想たる千年帝国の威信と存亡を賭けた戦いとして、第二次世界大戦が始まったのである。

ところが、当のしかけた側が敗北して帝国は滅亡し、さらに国家そのものも体制的に二分されたにもかかわらず、戦後40年を経ずして再び勢力を盛り返し、逆に戦勝国側の1大国、ソ連の体制がひっくり返ったことで再統

合まで成し遂げられてしまった。そのうえ、ドイツは今やヨーロッパ大陸の経済上の盟主として君臨している。

また、もうひとつの戦勝国イギリスは、体制が転覆するまでにはいかないものの、今や「7つの海の覇者」どころか、自らのシーレーンすらも満足に防衛できない中堅国家のひとつに成り下がってしまった。

現在のドイツを、墓中のアドルフ・ヒトラーが見たらいったい何と言うだろう。しかし、今日のドイツの隆盛が、少なくともナチズムによってもたらされたものではないことだけは確かである。

チェコのビルゼンに向かう街道上で撃破されたドイツ軍のパンター戦車

